

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより

開館30周年記念号

第28号/令和3年5月27日発行

太田備牧駒籠別荘八景十境詩画卷	2
小石川花名所	4
学寮創立十七周年記念祭	6
令和2年度のあゆみ	7
資料をご寄贈くださった方々	8
令和3年度の催し	8



文京区指定文化財「喜寿の舞」(館蔵)

おおた びぼくこまごめべっそうはつけいじつきょうし えまき
太田備牧駒籠別荘八景十境詩画卷

—館蔵資料の紹介—

おかげさまをもちまして、今年度、文京ふるさと歴史館は開館30周年を迎えることができました。みなさまのご支援・ご協力のもと、館は現在、多くの地域資料を収集・保存し、展示ほか館活動に活用しております。今回は、そうした館蔵資料のなかから「太田備牧駒籠別荘八景十境詩画卷」（以下「八景十境詩画卷」）をご紹介します。

八景十境詩画卷について

八景十境詩画卷は、詩文が記された詩巻一卷【画像1部分掲載】と、それに添うかたちで景色等が描かれた画卷一卷【画像2～5部分掲載】により構成されます。詩巻には、作成に関する記述を見ることができます。それによると、詩巻は、浜松藩主・太田資宗（1600～1680 中世の武将太田道灌の子孫）の江戸駒込（駒籠）屋敷（現 千駄木一）について、そこからの眺め「八景」と、屋敷内の見どころ「十境」を、儒学者・林鷺峯（1618～1680）が見立て、詩を詠み、その子・林梅洞（1643～1666）が書写したものです。また画卷は、詩が詠まれた後に、絵師・狩野安信（1614～1685）により描かれたと考えられています。太田家の子孫に受け継がれ、寄贈により現在は文京ふるさと歴史館が所蔵しています。

作成に関係した人びと

詩文を詠んだ鷺峯は、江戸時代初期の儒学者・林羅山（1583～1657）の子で、葵軒・向陽軒とも号しました。林家を継ぎ、儒学者として江戸幕府の文治政策に大きく関与した人物です。詩文のはじめの方に「太守知余既久交情稍渥」（【画像1】赤傍線部）という一文があります。これは「太守」つまり太田資宗と、「余」つまり林鷺峯が、その時点で旧知の親しい間柄であることを示したものかと思われます。実は、羅山も含めこの三者は、将軍・徳川家光の命を受け開始された武家系譜集『寛永諸家系図伝』の編纂事業に大きく関わる間柄でした。

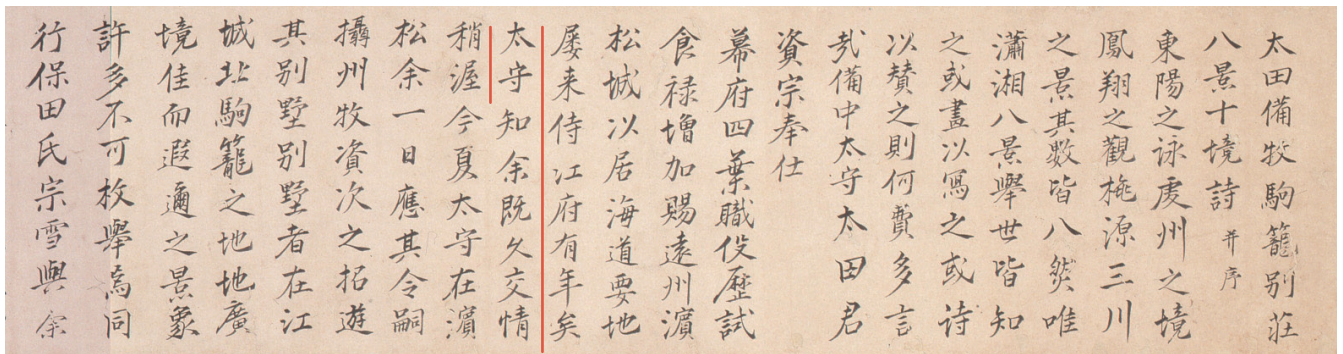
詩文にはまた「今夏太守在浜松余一日応其令嗣摂州牧資次之招遊…」から続く一文があります。そこには、藩主である資宗が浜松に滞在している夏、資宗の子・資次の招きに応じ、鷺峯が「駒籠別荘」を訪れ、そこで八景十境を見立てたこと、その後に資宗から詩文の作成を依頼されたことなどの事情が記されています。詩文の末には「寛文元年辛丑秋九月吉辰 向陽林子」とあり、これによれば詩文そのものは、寛文元年（1661）までに作成されたということになります。その詩文は後に、鷺峯の子・梅洞の筆により書写されますが、それについては詩文のあとがきのような形で、「右応太守之求不能峻拒操秃毫唯是代乃父之勞而已見者莫以字画議之」とあり、「太守（資宗）の求めにつき断るような状況ではなく、父・鷺峯の代わりに（梅洞が）筆を執った。（それ故に、この詩文を）字（だけ）をもって評価はしないように」との旨を伝えています。



【画像3】八景十境画卷（白鳥沼・千竿塙・百花場 部分）



【画像5】八景十境画卷（翫月亭 部分）



【画像1】八景十境詩巻（冒頭より部分）

描かれた八景十境

画卷に描かれる八景は、それぞれ「東台池島」「大洋層瀾」「編戸晚煙」「湯島菅祠」「土峰積雪」「武野平遠」「筑波岑蔚」「隅田長川」との見出しが記され、そこに不忍池やその周辺、江戸湾や人家、湯島天満宮、富士山、武蔵野、筑波山、隅田川等々の景色が墨の濃淡で柔らかく描かれています。また十境は、「清徹泉」「藤岸洞」「葫蘆洲」「松杉墩」「白鳥沼」「千竿塙」「百花場」「古木林」「錦楓径」「翫月亭」として、屋敷庭園内の見どころが描かれています。掲載の【画像2】から【画像5】は、そのうち十境部分、すなわち画卷の後半部分となります（実際には【画像2～5】の順番でつながっています）。前半と比較すると、色彩豊かに描かれており、また桜を描いた百花場（【画像3】やや左）と紅葉を描いた錦楓径（【画像4】左）の間に、夏の木立を思わせる古木林（【画像4】中央やや右）が配され、季節のうつろいが表現されています。また末尾には「狩野牧心齋安信図之」との落款があります。この画卷

は、安信の優品として高い評価を得ており、また八景十境詩画卷は、大名庭園の様子を伝える貴重な作品として、文京区の有形文化財に指定されています。

【画像1～5】のとおり、この見開きの紙面で八景十境詩画卷の一部を画像でご紹介していますが、実際の長さは、詩の部分だけでも約5.5メートル、画の部分は約10.7メートルにもなる、当館所蔵資料のなかでも最長の部類になる巻物です。館では平成5年度特別展「ぶんきょうの絵画—その美と心—」、平成20年度収蔵品展「蔵出し！文京ゆかりの絵画」等にその一部を展示しましたが、これまで全体を一括展示したことはありません。今後の課題とさせていただければと存じます。

また現在、太田家駒込屋敷の一部は、太田家から文京区に寄贈され、貴重な都市公園（千駄木ふれあいの杜 千駄木一）として活用されています。（東條 幸太郎）

参考 『文京区の文化財 2020 増補改訂版』（文京区教育委員会 / 発行）



【画像2】八景十境画卷（清徹泉・藤岸洞・葫蘆洲・松杉墩・白鳥沼部分）



【画像4】八景十境画卷（古木林・錦楓径部分）

小石川花名所

小石川は文京区の西部にあたり、昔から様々な名所があります。その中から、花に関わる名所を館蔵資料とともに紹介します。

江戸川の桜

現在では江戸川公園の桜が知られていますが、明治の頃はもう少し下流の中の橋や大曲の辺りが桜の名所でした。『新撰東京名所図会 小石川区之部』によると、明治17年(1884)に、近隣の人々が桜を植え始めたのが始まりでした。桜が増えていくうちに、桜を植えない大地主の家に町内の人が押しかけ、「其公共心の乏しきを責め」、その後地主は桜を植えたとあります。こうしてできた桜の名所は、川の兩岸に桜が咲く様子が小金井に似ていることから、新小金井とも呼ばれました。

江戸川の桜が人々に親しまれた様子は、当時の新聞からもわかります。明治41年(1908)4月17日の東京朝日新聞の記事です。

単騎の見頃は疾くに過ぎて八重は之からが丁度よい眺め、河筋には幾十艘の貸舟を浮べて怪しげな手附にヨロヨロと竿を操る者数しれず橋上黒山の見物を相待つて騒々しさ賑かさ電車の轟音も聞こえぬ程、殊に幾組かの写真師が四方から器械を据ゑて写真攻に攻め立てるので舟の中の若い女連は大弱り見物は又夫を面白がつてソラと囁す。

花見客が舟や橋の上から桜を楽しみ、騒がしい様子や、写真師に勝手に写真を撮られ困っている舟の上の若い女性など、花の下の賑わいが伝わってきます。新聞では桜の開花状況や花見の様子を知らせるだけでなく、本数を記事にしていることもあります。東京朝日新聞の大正6年(1917)3月12日「東京にある桜の数」には、江戸川の桜の本数が載っています。



図1 絵はがき (東京名所) 江戸川ノ桜

江戸川 船河原橋(とんへ橋)から江戸川橋まで全部三百八十本、其内一割五分が八重桜で余は染井吉野

前の明治41年4月17日の記事に八重桜が見ごろとありますが、江戸川の桜は一種類ではなく染井吉野と八重桜があり、八重桜は全体の一割五分植わっていたとわかります。また、大正7年4月14日の東京朝日新聞には、「江戸川の花見船」と題し舟遊びを紹介しています。

小桜橋の畔に桜の幹に目覚し時計を結びつけて前へ小娘が控へて居る、判じもの見たやうなので往来の人は屹度立留まるが別儀で無い、貸船の時間の番人だ、手を挙げて「八番の船一、時間ですよ」と呼ぶ、八番には酔漢が乗っている、船を寄せやうとするが決して目的には副はない、くるへ廻して、おまけに三四間の側で茶目目達(いよいよ)が面白づくに我が船を揺すり波を呉れるから愈以て酔漢の船は廻る

時間貸しの船を借りた酔っ払いがいたずらをされ、時間になっても岸に戻れなくなる様子が、面白く書かれています。江戸川の花見では、船に乗ることも多かったようで、絵はがきには、川に船が浮かんでいるものもあります【図1】。

桜で賑わった江戸川ですが、大雨による水害がたびたび起こりました。そのため、大正になると護岸工事が始まります。読売新聞の大正4年2月10日に「東京名所江戸川の桜の凋落」として工事の様子が記事になっています。

花の都の一名所 江戸川の桜も往時を誇りし栄華の姿は水害予防工事の進むに連れて日一日と薄らぎ行き、緑萌え出でんとする汀の春草は哀れ冷いコンクリートの下に葬られ、桜の太木は惜気もなく一本へ倒されんとす

工事によって、桜の下に生えていた草はコンクリートに変わり、桜の木が切られていることがわかります。一方で、工事後の護岸に桜の咲いている絵はがきもあります【図2】。最終的に護岸工事が徐々に進み、明治から続いた江戸川の桜は失われてしまいました。



図2 絵はがき 江戸川の桜



図3 三十六花撰 東京護国寺きりしま

護国寺のツツジ

太田南畝の編纂した『ひとつもと草』（文化3年・1806）の中に、十千亭の書いた「護国寺記」があります。これには、護国寺の由来が書かれています。その中で、「岩つゝじ」が多くあるとされています。江戸の季節ごとの景物を紹介した『江戸名所花暦』「夏之部」（文政10年・1827刊）にも、ツツジが紹介されています。

躑躅 きりしま …護国寺石段の左右 音羽町のさき。山号は神齡山、本尊は馬脳石如意輪観音、唐仏。元禄年中に本堂御建立あり。…本尊御開帳のみぎりは、やんごとなき御方の御奉納ありし御道具ををがましむ。

階段の左右に霧島ツツジがあること、護国寺や本尊の紹介や開帳が行われるとも書かれています。また、江戸の年中行事を紹介した『東都歳事記』（天保9年・1838刊）の3月に「躑躅霧嶋 景物 ○立夏の頃より杜鵑花にいたるまで、追々に咲く。…大塚護国寺石坂左右」とあります。「三十六花撰 東京護国寺きりしま」【図3】では、霧島ツツジが大きく描かれた後ろに、護国寺の建物と参拝客が見えます。資料によって岩ツツジと霧島ツツジがあり、種類は違いますが、護国寺のツツジが知られていたことはわかります。



図4 名所江戸百景 せき口上水端はせを庵樺やま

椿山

椿山は、現在の椿山荘のある辺り（関口二）です。『続江戸砂子温故名跡志』（享保20年・1735刊）では、季節ごとに訪れる場所を紹介した「四時遊観」の中で、「椿山…此山の前後一向に椿なり。」とたくさんの椿が生えている様子を紹介しています。また、『江戸名所花暦』「春之部」には「椿山 同 関口の通り、上小橋を渡り、右のかたへ上る阪のうへ一円をいふ。今はたえたり。」と書かれ、椿が絶えてしまったとあります。「名所江戸百景 せき口上水端はせを庵樺やま」【図4】（安政4年・1857刊）を見ると、椿の花らしきものは見えず、椿山の状況は、『江戸名所花暦』の文章と一致します。享保20年に生えていた椿は、文政10年頃になるとなくなってしまったとも考えられます。

今年度の収蔵品展では、ここで取り上げた花の名所も含めた江戸時代から昭和の初めの小石川の名所を、館蔵資料とともに紹介します。（齊藤 智美）

参考文献

市古夏生・鈴木健一校訂『江戸名所花暦』2001年 ちくま学芸文庫
朝倉治彦校訂『東都歳事記 1』1988年 東洋文庫 平凡社
小池章太郎編『江戸砂子』1976年 東京堂出版

学寮創立十七周年記念祭

現在東京大学農学部弥生キャンパスがある場所（現、弥生一）には、昭和10年（1935）まで、第一高等学校（現、東京大学教養部）がありました。帝国大学の予科としてその歴史が始まった一高には、全国から俊英が集まりました。

一高生は、基本的には学内に作られた寮で生活をしていました。明治39年（1906）には、寮は東、西、南、北、中、朶の六寮があり、そこで多くの学生が暮らしていました。寮内では、寮委員を代表とする自治組織が作られ、四綱領と呼ばれる規律を軸に、独自の学生文化を育てていました。

第一高等学校の寮における代表的な祝祭として、毎年3月1日におこなわれた、寄宿寮記念祭がありました。記念祭の日には、寮内が一般にも開放され、多くの人を訪れたといわれています。ここでは、明治40年におこなわれた、学寮創立十七周年記念祭の様子をご紹介します。

寄宿寮記念祭

明治40年3月1日、一高の学寮祭が開催されました。新渡戸稲造校長の祝辞から始まり、野試合（武者姿の学生による模擬合戦）、代表による相撲などがおこなわれた後、午後には寮の公開がおこなわれました。仮装行列や音楽の演奏のほか、来場者を楽しませるために、寮の部屋ごとに趣向を凝らした飾付がされました。

例えば西寮十四号室では、「動物標本室」の飾付がおこなわれました。

撃剣用の胴、陶器製観音、瓢箪、書物飯櫃を右より順に並べて、動物標本室（胴仏瓢本櫃）と説明したる看板を始めとし室内卓上に陳列せる標本を査ぶれば何れも奇想天外より落つる珍品なり。

『校友会雑誌』165号（明治40年3月25日発行）に載った谷崎潤一郎（一部（英法科）二年）のレポートによれば、室内には貂、四十雀、鱈、烏、虎などが展示されていましたが、これらの展示は、天國産の貂は“点を描いた紙”（紙に点を打ちたる者）、スカンピン國産の四十雀は“古いがま口”（腹下の古墓口を示す。始終空の意）など、ダジャレを駆使したものでした。

この展示のために、三部（医科）二年の学生が集う西寮十四号室では、同じ三部で通学生の杉田直樹にも、協力を依頼しています。当時の杉田の日記には、2月24日、26日に西寮十四号室の友人が相談に来たこと、28日には飾り付けを手伝ったことが記録されています。

また東寮十八号室は、部屋の前に「駅長室」という札

を下げ、室内では「Ikko Locomotive」と題した機関車のピストンロッドが回転する動力部の飾付が、二部（工科）の小里三六を中心におこなわれました。同室の内海磐夫（二部（工科）二年）の日記には、内海は忙しくしていてあまり手伝えなかったが、動力部の様子は「心棒弱くして廻転甚だまづし」と、前日もまだ不安な出来だったことが記されています。

この他にも、それぞれの部屋で趣向を凝らした様々な飾付がおこなわれ、寮内は多くの見物人で賑わいました。

学寮祭の夜

記念祭の夜には、全寮茶話会がおこなわれました。全寮茶話会とは、各学期に一度おこなわれた一高全体の懇親会で、校長などの教員や卒業生などの来賓を迎えて、桜鳴堂（一高のホール）で開催されました。茶話会では、新渡戸校長の演説などとともに、寮歌の披露がありました。そのほかにも、通学生の寄付による狂言や各寮代表による余興なども行われています。君島一郎（一部（英法科）二年）は、後に寮歌を「年毎の自治寮のお祭りにいわば奉納する祝い歌」だったと言い、各寮から発表される寮歌が、一高生にとって大切だったことを伝えています。

十七周年紀年祭で発表された東寮の寮歌「仇浪騒ぐ濁り世の」は、それまでの多くの寮歌とは大きく趣を変えた厚い友情の歌として、寮内だけでなく世間でも大いに唄われる歌になりました。特に四番の歌詞は、

友の憂ひに吾は泣き 吾が喜びに友は舞ふ
人生意気に感じては たぎる血汐の火と燃えて
染むる護国の旗の色 から紅を見ずや君

とあり、一高生だけでなく、多くの人に愛唱されたと言われています。この歌の作詞は、文芸部委員の岸巖（一部（独法科）二年）、作曲は内海磐夫でした。内海の日記によれば、2月13日に作曲の依頼を受け、「満更野心、好奇心もなかったではなし」と引き受け、「ちと優し過ぎはしれ共捨てたものでない」と岸の歌詞を評しています。また披露された寮歌について、「夜の余は寮歌に成功せり」と書いています。『校友会雑誌』165号では杉田直樹が、「その歌詞の優しさと調の血踊る旋律とは蓋し本年寮歌の尤なるもの」と記しています。

この日の楽しい宴は、深夜まで続いたそうです。

（加藤芳典）



絵はがき「第一高等学校」

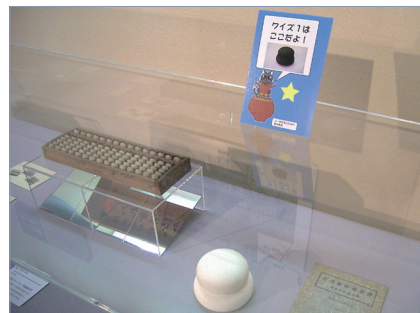
令和2年度のあゆみ

小・中学生のための歴史教室

「わがはい君 シルエットクイズ」

◆7月30日(木)～8月23日(日)

参加者数……69人



歴史教室

文の京ゆかりの文化人顕彰事業

◆朗読コンテスト

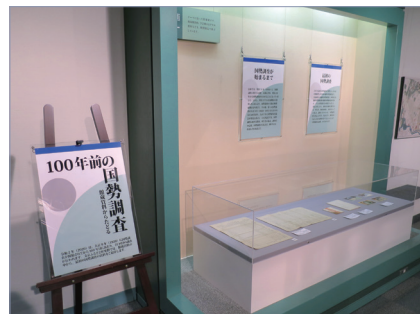
応募総数276人

本選11月15日(日) 会場:跡見学園女子大学ブLOSSAMホール

課題作家:芥川龍之介、川端康成、志賀直哉、太宰治、中島敦、宮沢賢治

参加者……16人・観覧者数……94人

12月28日(月)から1月3日(日)までCATVで放映(前編後編各57分)



ミニ企画 2

ミニ企画

◆6月2日(火)～9月22日(火)「音羽通りの陶磁器店 丸八商店」

◆9月25日(金)～12月25日(金)「100年前の国勢調査

—館蔵資料からたどる—

◆1月5日(火)～4月25日(日)「雅言分類—国学者が編んだ辞書—」



朗読コンテスト

ワークショップ

「あなたの名所ものがたり みんながレポーター」

◆募集期間11月10日(火)～1月8日(金)

参加者数……11人

2月6日(土)、3月15日(月)文京区民チャンネルで放送、後日YouTube

「あらぶんちょ!チャンネル」にて配信



ミニ企画 3

特別展 記念講演会

「ジョサイア・コンドルの庭園観を探る」/藤井英二郎氏(千葉大学名誉教授)

◆3月22日(月)から28日(日)までCATVで放映(前編後編各57分)、後日

文京区公式YouTubeにて配信

*新型コロナウイルスの流行に伴う緊急事態宣言の発令に伴い、予定していた特別展などの事業は中止とした。

ふるさと歴史館からのお知らせ

文京ふるさと歴史館は、令和3年4月13日に開館30周年を迎えることができました。これもひとえに普段から歴史館の事業にご協力いただいている資料寄贈者の方々や文京ふるさと歴史館友の会、また展示や企画にご参加いただいている来館者の皆様のおかげです。いつもありがとうございます。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症防止のため、3月3日から5月31日までの長期休館をはじめ、常設展示の一部休止やさまざまな企画の中止など、皆様には多大なご迷惑をおかけいたしました。

また令和3年度には、8月から12月にかけて、空調設備の改修を予定しております。この間も長期の休館をさせていただくことになりご迷惑をおかけいたしますが、今後とも文京ふるさと歴史館をよろしくお願いたします。

令和3年度の催し

※それぞれの事業の開催日時や募集方法等は、歴史館ホームページ及び「区報ぶんきょう」にてお知らせします。
ホームページ：<https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/>

新型コロナウイルス感染症防止対策のため、展示及び事業の日程及び内容に変更・中止が生じる場合があります。
最新情報は歴史館ホームページでお知らせします。

館内空調設備の改修のため、8月から12月にかけて休館する予定です。
詳細は歴史館ホームページでお知らせします。

開館30周年記念 収蔵品展

小石川をめぐる 資料でみる名所

6月19日(土)～7月25日(日)

ふるさと歴史館に収蔵されている資料を通じて、名所を中心に小石川をめぐる予定です。

夏休み歴史教室

文の京オンラインクイズ(仮)

7月20日(火)～8月31日(火) 予定

歴史館のホームページで問題をダウンロードし、ホームページの中から答えを探す企画です。

開館30周年記念 特別展

館蔵文化財展(仮)

令和4年2月5日(土)～3月21日(月・祝) 予定

館蔵の貴重な文化財などを展示します。

史跡めぐり

歴史館友の会まち案内ボランティアが、史跡等をご案内します。区報等で募集します。

参加費 保険料・入館料等実費。

文化人顕彰事業 朗読コンテスト

本選 11月14日(日) 13時～16時

会場 跡見学園女子大学プロッサムホール

文京ゆかりの作家の作品を朗読。芥川龍之介『トロッコ』、伊藤左千夫『野菊の墓』、田山花袋『東京の三十年』、永井荷風『日和下駄』、夏目漱石『夢十夜』、樋口一葉『十三夜』。コンテスト形式で優秀者を選び表彰します。

*参加者・観覧者募集の方法は、ホームページなどでお知らせします。

文化人顕彰事業 歴史講演会

文京ゆかりの文化人に関する講演会を予定しています。

区報等で募集します。

常設展示ボランティアガイド【現在休止中】

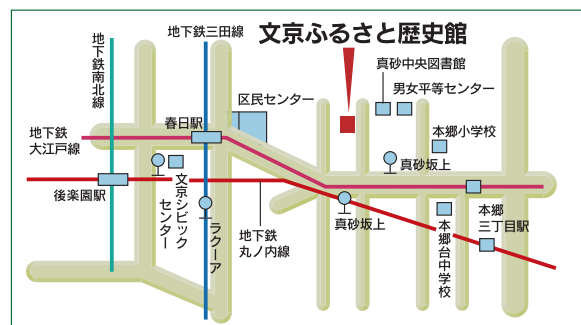
ふるさと歴史館ボランティアガイドが、毎週土・日曜日、13時から17時まで常設展示の解説を行います(申込不要・無料)。上記日時以外のご希望も受付けています。3週間前までに、文京ふるさと歴史館へ電話連絡し、申請書を提出してください。

レファレンス【現在休止中】

毎月第2・4木曜日13時30分から16時30分まで、館内1階レファレンスコーナーにて、ご質問にお答えします。

利用のご案内

- ◆開館時間：午前10時から午後5時まで
- ◆休館日：月曜日・第4火曜日(休日にあたる時は翌日) くんじょう期間、年末年始
- ◆入館料：一般個人100円、団体(20人以上)70円
中学生以下・65才以上無料
*特別展は別に定めます
- ◆交通：東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
都営バス 都02 上69 「真砂坂上」から徒歩1分
文京区コミュニティバスB-ぐる「文京シビックセンター」または「ラクーア」から徒歩10分
- ◆ホームページ：<https://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/> 〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号 電話(03)3818-7221



文京ふるさと歴史館